

肉弾

映画文学人生論

原作：櫻井忠温（1906）「丁未出版」
参考：夏目漱石『坊っちゃん』『草枕』『趣味の遺伝』
（1906）『満韓ところどころ』1909）
田山花袋『一兵卒』（1908）「早稲田文学」
水野廣徳『此一戦』（1911）「博文館」
芥川龍之介『将軍』（1921）「改造」

天に謝す予は予の義務を尽くしたり

櫻井忠温『肉弾』が発行されたのは日露戦争終結一年後の明治三十九年。漱石が『坊っちゃん』『草枕』を発表したのもこの年だが、当時は『肉弾』のほうがベストセラーだったという。

『肉弾』は文学だろうか。「十年の遺恨を骨に刻み肝に銘して、待ちに待ったるこのたびの大戦争、遼東の空に迷った十年前の戦友の魂は、向かうところ敵なき皇軍を迎えていかばかり喜んだことであつたらうか？」というような文章は敵と味方がはつきりして、わかりやすい。直接経験者による軍記が文学だとすれば『肉弾』は文学だ。

しかし、作者は「予、素（もと）、一介の武弁（武官）、文事をもつて世に見（まみ）ゆるの選に非らず」と述べている。本人も自分が文学者だとは思っていない。『坊っちゃん』も勸善懲惡の文学だが、『肉弾』とどこが違うのだろう。

奇しくも櫻井忠温は漱石が松山中学で英語を教えた教え子だった。山嵐のモデルとも云われる弘中又一氏の手紙によれば、「君は級中の美少年にて数学は九十点位、作文と図画は素人離れしていた、と夏目（漱石）君がいつていた」という。

数学が九十点だったというのはウソらしいが、写真をみると美少年というのはウソではない。乃木希典大将の第三軍に属し、連隊旗を奉侍する名誉を与えられた。旗手に選ばれるだけあって、勇者らしく凛々しい顔をしている。英語に関しては



肉弾

映画文学人生論

『肉弾』に次の記述がある。

八月七日、大孤山の戦いにこそ、ただ一死あるのみと覚悟した。身は旅順の鬼と消ゆるとも、魂は七生の忠を忘れざるべし。その前日に届いた家兄の書には左の二句が記してあった。

「名誉を思ふな、戦功を思ふな、ただ汝の義務を守るべし」

「ネルソンがトラファルガーの海戦に名誉の戦死を遂ぐる時、告げて曰く、

“Thank God, I have done my duty.” (天に謝す予は予の義務を尽くしたり)と。

当時の日本は日英同盟を結んでいたから、英語は大東亜戦争の頃のような敵性言語とは考えられていない。櫻井忠温は漱石の英語の講義をまじめに受講し、読解力を身につけていたようだ。ただし、「然し是からは日本も段々発展するでせう」と三四郎のような素朴な意見を述べると、「亡びるね」と先生は答えたかもしれない。

第一回旅順要塞総攻撃で作者は右手を打ち貫かれ、瀕死の重傷の重傷を負ったが、田山花袋『一兵卒』とちがって、弱音をはかない。乃木將軍に對しては芥川龍之介『將軍』で描かれているような批判的な眼差しを向けることもなかった。

我が大君、ものなおもほし、ことしあらば、

火にも水にも、われなけなくに 櫻井忠温